

国語

注意

- 1 開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
- 2 解答は、全て解答用紙に記入しなさい。
- 3 漢字は楷書、仮名遣いは現代仮名遣いで書きなさい。
- 4 解答を選択肢から選ぶ問題は、記号で書きなさい。
- 5 問題用紙は、冊子の形になっています。
- 6 問題は、表紙の裏を1ページとし、7ページまであります。開始の合図で問題用紙の各ページを確認し、始めなさい。
- 7 問題用紙の表紙と解答用紙の受検番号欄に、それぞれ受検番号を記入しなさい。

受検番号

受検番号

一 次の【本の一部】と【資料1】、【資料2】を読んで、後の1から5までの各問いに答えなさい。

【本の一部】

私たちの日常生活の中で何気なく使われている道具を人との関係で観察し直してみると、日本ならではのデザインが見えてきます。例えば、使う人の能力を前提に成立しているもの。ご飯を食べる時に使う「日本の箸」はその代表格です。先を細くした二本の棒を使いこなすだけで、小さな米粒や豆や、けっこう大きなジャガイモまで挟むことができるばかりか、この単純きわまる道具で肉を切り離したり柔らかいものを刺して割ったり、みそ汁をかき混ぜたり具のツルツル滑るワカメをつまみ上げて口へと運んだり、海苔で白米を包んだりと、用途は多様で、小さな頃から経験を積んだ我々は、毎日のように二本の棒を無意識に使いこなしているのです。ここには西洋のフォーク、ナイフとは全く異なる「関係のデザイン」が見られます。フォーク、ナイフの進化について、ヘンリー・ペトロスキーが『フォークの歯はなぜ四本になったか』に詳しく書いていて、それはそれで微笑ましく、フォークとナイフが共に進化（共進化）した経緯は大変興味深い。現代のフォーク、ナイフには取手の部分があり、握りやすいように膨らんでいて、膨らみ具合がデザインの特徴になっている場合も多いでしょう。対するに、箸には取手にあたる部分がなく、取手どころか、どの指はどこに当てて、といったデザインは一切施されていません。ものの側から「このように使ってください」と教え示すデザインではなく、素材のままそこに在って、見掛けは「どうぞご自由に」とやや素っ気ないくらいですから、箸を初めて目にした他国の人は、いったいこれをどう使うつもりなのか？ と面食らうに違いありません。しかし使用法をマスターしてしまえば、食べるための道具としてのこの使い勝手の良さは他に代えがたいものになることでしょう。つまりは、二本の棒である単純さが、人の本来持っている能力をむしろ引き出しており、そこには人の所作さえもが生まれます。①箸において日本人は、それ以上の進化による利便は求めてきませんでした。ですから西洋のフォークとナイフのような目に見える進化はしなかったものの、日本の箸は、ほぼ棒状のままの中国、韓国のそれとは異なり、かつ金属ではなく主に木や竹を使い、先をかなり細くすることで、より繊細な動きに対応できるよう微妙に進化したのみならず、漆塗りのような丁寧な表面仕上げや材質選びにも伝統が活かされてきました。このように当たりまえの日常の中に、ほどほどのところで留めておきながら徹底的に突き詰めようとする日本らしさを見出すことができます。

(中略)

もう一つ、忘れてならないのが「ふろしき」です。何十通りもの包み方があり、あらゆる包む対象に合わせた対応が可能ばかりか、使わない時には小さく畳んでおける。つまり自由自在に変化できる一枚の布の状態に留めてあるわけで、それ以上はデザインしていません。バッグのように持手を付けたり袋状に縫ったりは敢えてせずに、どこまでも原型を保ったまま使われ続けている。我々が何もかもを便利至上に走っていたのであれば、すでに息絶えてしまってもおかしくなかった道具の一つなのかもしれません。しかし人間の側に備わっている「考える」力や「適応する」力を引き出す余地をたっぷり残した「ふろしき」という一枚の布が、宅配便で何でも便利に届くこの時代にまでちゃんと残っていることと自体が注目値します。これも、やり過ぎないほどほどのデザインの典型なのです。改めて申しあげるまでもなく、一枚の正方形の布であるがゆえに、「ふろしき」に施されるグラフィックデザインは無限の可能性に満ちている。今の時代、もっともっと利便性を求めてその場その場に合わせた様々な形態をつくり出しているのですが、ある意味で不便な一枚の布が、ほどほどなところで留められたことよって、②無限と言いたいほど表現可能なキャンパスになっている。また、少しばかり昔の日本の生活を思い出してみるなら、普段は折り畳んで仕舞い、使う時だけパタパタと広げて、必要なところに置けば室内の間仕切りとなる「屏風」などにも、「箸」や「ふろしき」と同じ「ほどほど」が見えてくるはずです。今後甦るべき道具を、多く日常生活文化史に発見できるのではないのでしょうか。

デザインを考えることは、人の豊かさとは何かを考えることに他なりません。日常を少し見回してみただけでも、箸やふろしきや屏風のように日本人の振る舞いに準じて育まれてきた素晴らしいものが残っているのだと気づかされます。そしてそれらが体現しているのが「ほどほどを極める」なのです。人間の身体どころか心までを使わないで済むようにしてきてしまった必要以上の間違った便利さを見直して、③ほどほどを

極めるレベルを今一度模索しなければならぬ時が来ているようです。それこそは資源の問題、エネルギー問題、そしてこの国の文化的価値の問題などと密接に繋がってくると思われてなりません。

心と身体を使わないで済むような便利さが、果たして人を本当に豊かにするのか。昔から普段よく言われてきた「ほどほど」や「いい塩梅」などの言葉が、実は日本人が忘れてはならない大切な感性をしかと伝えていているのです。

(注) ヘンリー・ペトロスキー||アメリカ合衆国の工学者。 グラフィックデザイン||印刷を媒体とした、視覚情報伝達のためのデザイン。
体現||抽象的な事柄を具体的な形に表わすこと。

(佐藤 卓『塑する思考』による。)

【資料1】

地球上に暮らす人類の食事の方法を大別すると、「手食」「ナイフ・フォーク・スプーン食」「箸食」に分けられます。

(中略)

日本の箸食は、やはり世界的にみても興味深い文化のひとつではないでしょうか。世界で約二〇億人いる箸食の人たちのなかで、日本人だけが純粋な箸食といわれています。

その昔、日本は中国からの文化的影響を多大に受けていましたが、その中国では箸と匙が併用されるのに対し、日本では箸のみで食されています。

これは日本の独特の米食文化、木の文化が関係していますが、奈良・平安時代に碗が発達したことが、匙を使わない純粋な箸食文化を生み出したともいわれています。片手に箸、片手に器を持って食事するのは、日本ならではのスタイルです。日本は、食事用の箸だけでも木箸、塗箸、竹箸、割箸と種類が豊富にあり、取り箸や調理箸なども発展させてきました。これだけ多彩な箸食文化を築き上げた国は、ほかに類をみません。

(高橋 隆太『おはしのおはなし 自分の箸と出会うため』による。)

【資料2】

新しきや便利さという進歩はうれいものであり、そのすべては、僕たち自身が望んだものだけ、それと同時に、つい昨日まで当たり前のようにあった平凡なものが、もうどこにもなくなっていくことに、ある日気がついた。

新聞配達足音で目を覚ます朝や、知らない街で迷子になることや、遠い国で暮らす恋人が、今日、何をしているのかを想像する日々など、それらは本当になくなっていいものなのか。

時代とともにいつの間にか、困ったり、苦労したり、味わったり、楽しんだり、工夫をしたり、考えたりという経験がなくなっているということは、ただなくなるだけのことではなく、無意識的に自分が心の拠り所にしてきたものが、霞のように消えてしまうこともある。安心してそこにいつまでもあると思いついていたものが。

テクノロジーの進歩を否定するつもりはないが、せめて、自分の頭で考えること、自分の心で判断すること、自分の身体で体験することなど、ありきたりの平凡で、当たり前前なものを、僕は守っていききたい。守っていくために決して忘れないようにしたい。そういうものが自分をつくってきたと思うからだ。

(松浦 弥太郎『なくなったら困る100のしあわせ』による。)

1 「西洋のフォークとナイフ」と「日本の箸」のデザインの特徴について、次のように、本文中の対照的な表現をまとめました。空欄にあてはまる適切な言葉を、「本の一部」から二十五字で抜き出して書きなさい。

西洋のフォークとナイフのデザインの特徴
()



日本の箸のデザインの特徴
見掛けは「どうぞご自由に」とやや素っ気ない

2 「本の一部」の——線部①について、筆者がこのように述べているのはなぜですか。理由を書きなさい。

3 「本の一部」と「資料1」を読み比べ、「資料1」からのみわかることはどれですか。最も適切なものを、次のアからエまでの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本では箸の材質選別に木の文化の伝統が活かされてきた。 イ 日本の箸は日本人の振る舞いに準じて育まれてきたものだ。
ウ 日本は箸と匙を併用せず、純粋な箸食文化といわれている。 エ 中国・韓国の箸はほぼ棒状であるが、日本の箸は先が細い。

4 「本の一部」の——線部②を説明したものとして最も適切なものを、次のアからエまでの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ふろしきは原型を保ったままのものであるが、想像力を働かせれば究極の美を心の中に描き出すことができるということ。
イ あらゆる包む対象に対応できるため、ふろしきはこの時代にまで残っており、今後も永遠に存在し続けていくということ。
ウ ふろしきが正方形という野暮な形であるので、粋な持ち物になるよう包み方のパターンが無数に考え出されたということ。
エ 単純な形態で留められたふろしきだからこそ、表面に様々な文様や色彩など際限なく美しく豊かに創作できるということ。

5 「本の一部」に——線部③とありますが、どのようなことですか。次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。

条件1 「ほどほど」とはどのような状態であるのか、「本の一部」の言葉を用いて書くこと。
条件2 「本の一部」と「資料2」をふまえて書くこと。

二

短歌を作る学習に取り組んでいるゆうきさんたちは、次の【本の一部】を読んで、「短歌を作るポイント」について理解を深めています。【本の一部】、「話し合いの様子」、「話し合いのまとめ」、「ゆうきさんの振り返り」を読んで、後の1から4までの各問いに答えなさい。

【本の一部】

先日、用事があって京都に行くことになり、東京駅から新幹線に乗りました。出発したときはかなり激しく雨が降っていたのですが、富士山が見えてくるあたりから雨が上がり、浜名湖にさしかかったころにはすっかり晴天に。そして、うれしいことに湖の上にくつきりと掛かった虹を車窓から眺めることができたのでした。わっ、感激！ というわけで、早速この光景を歌に詠んでみようと思いい立ちました。できたのが、次の一首です。

【A】 呼び掛けてみたき近さにかがやけり浜名湖またぐ七色の虹

野原に掛かる虹や、街の上にかがやく虹は見たことがあります。湖の上空の虹と出合ったのは初めてでした。浜名湖を見下ろすように立つ虹は、大らかにゆったりとしているのですが、それでも意外にすぐ近くにあるように感じられました。そんな驚きを託してみたのが、「呼び掛けてみたき近さ」という表現です。新幹線に乗っているのを忘れて、「おい」と呼び掛けてみたくなったのでした。うん、なかなかの自信作ができました。

満足満足、とうぬぼれたところで、この歌の言葉遣いについて簡単に説明したいと思います。「呼び掛けてみたき」「かがやけり」といった表現に対して、古めかしい感じを持った人がいることでしょうか。

これは「文語」という言葉の体系にあたります。文語では「○○けり」「○○ぬ」「○○せむ」などの、やや仰々しい感じの言葉が出てきます。それに対して、現代の私たちが使っているのが「口語」で、「○○した」「○○です」「○○しよう」などのおなじみの表現がそうです。今では私たちが日常生活で文語を使うことはほとんどありません。一つ心当たりがあるとなれば、時代劇でしょうか。正義の味方の主人公が悪代官に向かって、

「罪なき人を苦しめたる悪事の数々、断じて許すまいぞ」

と格好よく言い放ちますが、このときの「罪なき」「苦しめたる」「許すまい」が文語に相当します。『万葉集』の昔から明治時代に至るまで、歌は文語で詠まれていました。明治の文明開化とともに和歌の世界にも新たな風が吹き込んで、次第に口語化へと傾いてゆきます。

文明開化から一五〇年近くたった現在でも、短歌の世界には文語表現を好んで使う作者がいます。私もその一人。別に時代劇のヒーローに憧れているからではなく、文語の持つ重厚な雰囲気惹かれるからです。

たとえば、ききほどの虹の歌の「かがやけり」の「り」は文語の助動詞で、この場合は継続の意味を表します。「かがやけり」とすると、「ずっとかがやいているんだなあ」と深々と思いを込めた言い方になるのです。口語で「かがやいているなあ」とするよりも格段に鮮やか。文語の助動詞は「すぐれもの」です。

さてさて、話があちこちしましたが、新幹線の中で詠んだ虹の歌にもどります。浜名湖を見ながら会心の一首を得て大満足の私だったので、列車が名古屋駅に着くころに、ふっふつと疑問が湧き上がってきました。

「結局はこれでいいの？ どうもしっくりと来ない」

そう思えてならなくなつたのです。「七色の虹」ときれいにまとめたつもりだけど、本当に七色だったの？ 実際に数えてみたの？ 数えなかつたとしても、七色だとそのとき確かに感じたの？ そんなふうに関心かけてみました。

その結果、恥ずかしいことに、私はよく観察しないまま「虹なら七色でしょ」と決め付けて詠んでいたことに気付いたのです。出来合いの言い回しを安易に持ってきただけ。これはいけません。大いに反省しました。そして、もう一度目をつぶって浜名湖上空の虹を思い描いてみました。すると、ああ青色がきれいだった、と思い出しました。上のほうへゆくにつれて赤みが増していったけれど、虹の半円形の内側の濃い青色が際立っていたなあ、と。

目的地の京都に着くまでいろいろと結句を考えた末、ついに私は次のように改作をしました。

B 呼び掛けてみたき近さにかがやけり浜名湖またぐ虹の青色

心に残った「青色」だけに限定して表すことにしたのです。七色が一色になりましたが、数の多い少ないは関係ありません。一色であっても、確かな実感に支えられていれば七色よりも強いのです。これで本当に一首完成。めでたし、めでたし。

後日、ある先輩から頂戴した歌集を読みましたら、このような作品がありました。

C 黄と藍とことさら映えて冬の虹時雨過ぎたる琵琶湖より立つ (秋葉四郎『東京二十四時』)

滋賀県の琵琶湖の上に立った虹を詠んでいます。しかも冬の虹。毅然とした美しさを感じさせます。黄色と藍色が「ことさら」(特に、という意味)目立ってきれいなことを作者は表しています。七色の中から二色を選んだところ、すばらしいと思います。青色一色の私の歌より、「黄と藍」のこちらの歌のほうがずっといいなあ、と脱帽しました。作者はじっくりと虹と向き合ったからこそ、その時その場所ではか受けとめることのできない「黄と藍」を選び取ることができたのです。

(栗木 京子『短歌をつくろう』による。)

【話し合いの様子】

ゆうきさん：「本の一部」の後半「さてさて、」以降の内容から短歌を作るポイントを話し合いました。

かおるさん：筆者は、**A**の短歌の結句「七色の虹」がじっくりと来ずに、**B**のように「虹の青色」と作り直しているね。最初は、よく観察しないまま「虹なら七色」と決めつけたけれど、もう一度虹を思い描いて、一番印象に残った青色を使って表現したんだよね。

つばきさん：そうだね。「本の一部」の内容から、「七色の虹」という表現より「虹の青色」の方がよい理由は、「**I**」から」とまとめることができるね。

かおるさん：**C**の短歌は、作者の秋葉さんがじっくりと観察した結果、その時その場所ではか受けとめることのできない「黄と藍」を選ぶことができたよ、筆者は述べているよ。

ゆうきさん：短歌を作るときには、適切に言葉を選ぶことも重要なんだね。筆者は、**C**の短歌から「毅然とした美しさ」を感じているけれど、それも秋葉さんが選んだ言葉から伝わってきたんだね。その理由

【話し合いのまとめ】

○短歌を作るポイント

①じっくりと観察して表現する。

②適切に言葉を選ぶ。

筆者は、虹をよく観察しないまま「七色の虹」としたが、もう一度思い描くことで青色がきれいだったことを思い出し、「虹の青色」と表現した。

・**C**の短歌に使われている言葉の意味や特徴に注目すると、

II

という情景が思い描かれることから、筆者は「毅然とした美しさ」を感じている。

を、言葉について調べてまとめてみよう。

かおるさん：まず「毅然」の意味を確認しよう。「意志が強く、物事に動ぜずし

っかりしている様子」という意味だよ。

つばささん：「時雨」は、国語辞典を調べると「冬の初め頃の、降ったりやんだ

りする雨」と書いてあるよ。

ゆうきさん：「映える」は、①光を受けて輝く ②目立って、鮮やかに見える「

つばささん：「虹」を調べたら、夏の季語になっているよ。だから、わざわざ「冬

かおるさん：虹は「かかると」という表現だけでなく、「立つ」という言葉を使う

こともできるんだね。

ゆうきさん：これらの言葉の意味や特徴をもとに、筆者が「毅然とした美しさ」と感じた理由をまとめてみよう。

【ゆうきさんの振り返り】

短歌を作る学習を通じて、三十一音という限られた中で表

現するために、適切に言葉を選ぶことが大切だと感じた。

これからの学習や生活の中で、語いを豊かにすることに取

り組んでいきたい。

1 【本の一部】の——線部について、短歌において文語を用いる効果は、どのように述べられていますか。最も適切なものを、次のアからエまでの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 口語で作ることが当たり前だと考えられている短歌に、仰々しい感じをもたせることができる。

イ 短歌に落ち着いた雰囲気をもたせたり、伝えたいことを鮮やかに表現したりすることができる。

ウ 『万葉集』の時代から明治時代にいたるまで使われていた言葉に、新しい風を吹かせることができる。

エ すぐれた文語の助動詞の意味を知ることができ、今と昔の言葉の違いを理解することができる。

2 【話し合いの様子】の空欄 I にあてはまる適切な内容を、【本の一部】の言葉を用いて、四十字以内で書きなさい。

3 【話し合いのまとめ】の空欄 II にあてはまる適切な内容を、【本の一部】と【話し合いの様子】をふまえて、四十字以上、五十字以内で書きなさい。

4 【ゆうきさんの振り返り】の——線部について、語いを豊かにするために、あなたはどのような方法が有効だと考えますか。次の条件1から条件3にしたがって書きなさい。

- 条件1 語いを豊かにするとはどういうことかがわかるように書くこと。
- 条件2 あなたが有効だと考える方法と、そのように考える理由を具体的に書くこと。
- 条件3 原稿用紙の正しい使い方にしたがって、百字以上、百四十字以内で書くこと。

三 次の1から4までの各問いに答えなさい。

- 1 次の①から⑤までの文中の —— 線部のカタカナを漢字に直して書きなさい。
- ① 店舗をカク^{カク}チヨウ^ウする。 ② 彼女の努力には舌をマ^マく。 ③ 友人を家にシヨウ^ウタイ^イする。
- ④ 食後にお皿をアラ^{アラ}う。 ⑤ 偉大なコウ^ウセキ^キを残す。
- 2 次の①から⑤までの文中の —— 線部の漢字の正しい読みをひらがなで書きなさい。
- ① 旅行の計画を練^{レン}る。 ② 校内に憩^{ケイ}いの場を作る。 ③ 閑^{カン}静な住宅街に住む。
- ④ 抑揚^{ヨウ}をつけて話^ワす。 ⑤ 穏^{オン}やかな毎日^{メイ}を過^カす。
- 3 次の文章を読んで、後の①と②の各問いに答えなさい。

地球以外に生きものが存在する惑星は、今のところ見つかっていません。I、宇宙には、太陽とどのような恒星はたくさんありますし、その周りをまわっている地球のような惑星も最近の観測で次々と見つかりました。もしも地球とどのような条件の惑星があれば、私たちと同じような生きものがいるかもしれません。

(中村 桂子 『科学は未来をひらくへ中学生からの大学講義』3)による。

- ① 空欄 I にあてはまる言葉として、最も適切なものを、次のAからIまでのの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- A つまり I だから U さらに W しかし
- ② 線部「たくさん」の品詞名を漢字で書きなさい。

4 次の『竹取物語』の【文章の一部】とその【現代語訳】です。これらを読んで、後の①と②の各問いに答えなさい。

【文章の一部】

今は昔、竹取の翁おきなといふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

【現代語訳】

今ではもう昔のことだが、竹取の翁とよばれる人がいた。野や山に分け入って竹を取っては、いろいろな物を作るのに使っていた。名前を、さぬきのみやつことといった。(ある日のこと、)その竹の中に、根もとの光る竹が一本あった。不思議に思って、近寄って見ると、筒の中が光っている。それを見ると、三寸ほどの大きさの人が、たいへんかわいい様子で座っている。

- ① 【文章の一部】の中の —— 線部は、だれの動作ですか。【文章の一部】の中から八字で抜き出して書きなさい。
- ② 【文章の一部】の中の —— 線部を現代仮名遣いに直して、全て書きなさい。

国語

解答用紙

※印の欄には何も記入しないこと。

※ []

※ []

※ []

5					4	3	2	1

4						3			2	1

4		3	2	1		
②	①	①				
			る	①		
			②	②		
			い	<		
			③	③		
			④	④		
			う			
			⑤	⑤		
			やかな			

140字 100字

50

40

※ []

受検番号 []

